相源寮集

十一

へ遠13
1580
11

門へ遠13
彌1580
卷11

此一篇ハ尾張ノ草せり田舎人の頑しく某といふ朋友の稿本を見て嘲ルニハ
掖手子ガ女中ヲ調弄るニハ妹背山の御殿場を宣孝筑紫ヲ赴き紫式部ガ
画賛さるわらハ石魂録の面影るり藍より出て水浅葱染返ーハ紫ヲ
也一言ヲ遺龍ろう説得是了然云ハ無理ヲもあーねど五百羅漢の其
中ニ必親ヲ侶ニ類のあるヲ比しく年々歳々著述數十部ヲ及ぶるどヲ
他のヲも自のヲも肖るものヲ多くてハかるを扨足下ハ此二ツを難じて未似るる
事を本編ヲ綴るを尤もぬハいるヲ何ぞと云ヲ掖手子と式部ヲ踊の呼望
画賛の跳田畔の池ヲ庭の泉水事ニそ異ニ入水の覺悟又ハ冬く遇ぬ父
名告うるも二度ヲそ是とても蒙求の比事ヲ倣ふとヲもあるも金聖難ろ
所謂正犯るどの文法を博識わかーて用るヲも非ず都て余倉卒ろ錯て
實正ハ言句も出ずと自已ろ我非を揚褸の使女ガ言辞ろ起筆す

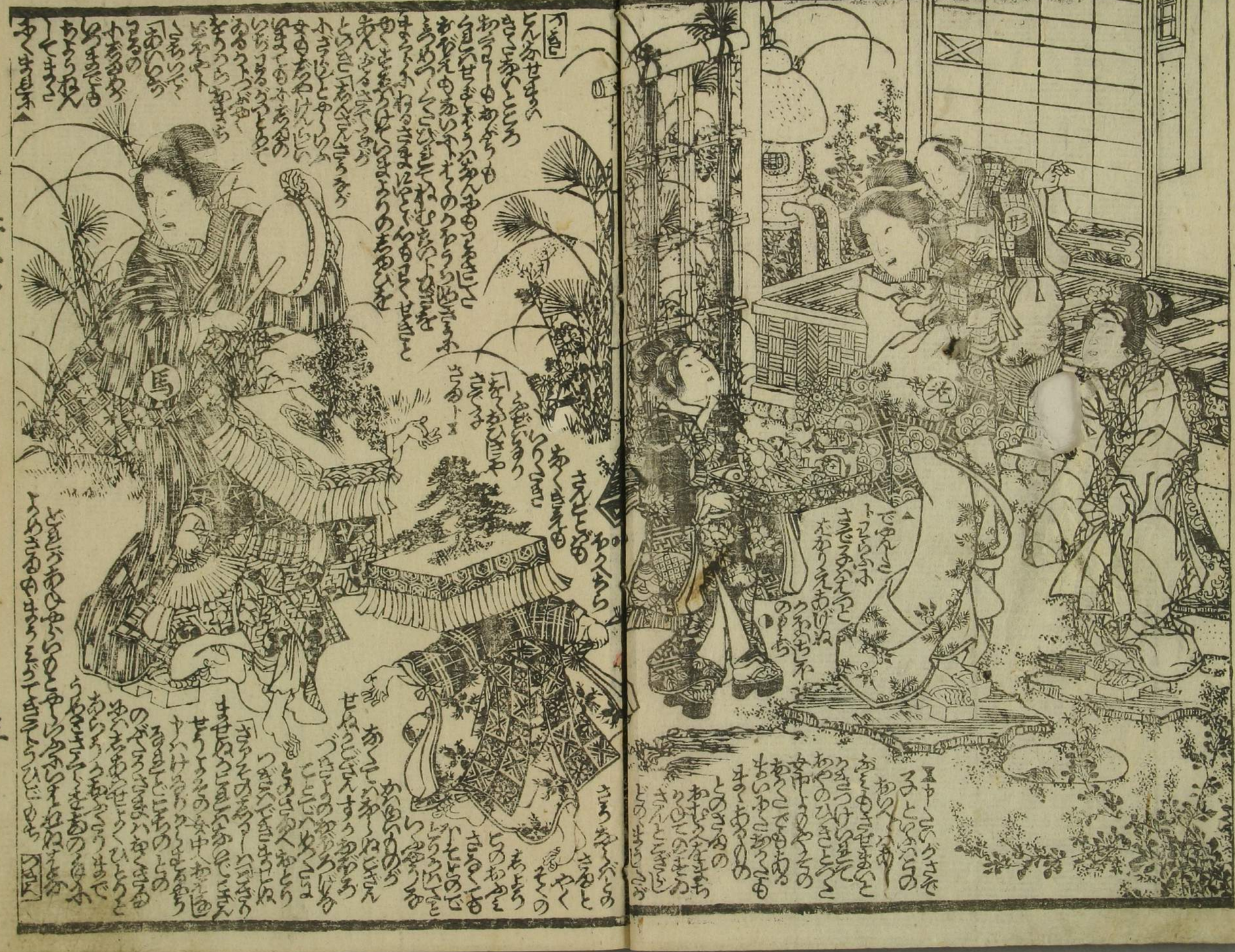
(五) 安政五年午孟春新刻　柳々老人仙果

丹生使宣孝従類ホ大藏信村ホ
凌轢せらるゝハ寛和元年七月十三日
ゾ日本紀畧ゥ其由出ル
一条院天皇の御代の
事とさるハ
悪の
剣の
戯作
ゥ

種村
業式
部を
恋慕
の
一條ハ
根も
るき
愚作
ゥり

偖紫の
天式部
負智
盛粧を
照〻見る所
あでやかなり

紫姐〻鯛を喫るを嗜事
十二編ふ詳なり


老
馬

つゞき
二
寿
延
梶
光
嶋
酉

つき
馬
月西
鳥

つぎ

桜

國貞画　仙果作

つき
童
兵

種

種

仙果作　國貞画